

## 編集後記

コロナ禍での2つ目のオリンピックとなる北京冬季五輪も盛会に終わり、日本選手団は素晴らしい活躍を見せて過去最多のメダルを獲得しました。極限まで鍛え抜かれたアスリート達のパフォーマンスに様々なドラマが展開されました。一方、外交ボイコットやスキージャンプスース規定違反、ドーピング疑惑など後味の悪さが残る問題や、間の悪いサブチャンネル切り替え、人気マスコット「ピンドウンドゥン」から男性が出てくるなど呆れるハプニングもありました。そして今月4日からは10日間のパラリンピックが始まりました。引き続き選手たちの健闘に注目したいと思います。

「誌上ギャラリー」には宇根文穂先生より霧島山から望む「開聞岳と桜島」をいただきました。二つの鹿児島のシンボルが黄金色に輝く朝焼けを背に美しく浮かび上がっています。

「学術」には鹿児島医療センター心臓血管外科の永富脩二先生から「血行動態破綻をきたしたアルカプトン尿症に合併する大動脈弁狭窄症の一例」をご提示いただきました。大動脈弁狭窄症手術中の大動脈弁の所見から、原因疾患としてのアルカプトン尿症の診断に至った非常に稀な症例が報告されています。

「鹿児島市内科医会1月例会」から、鹿児島大学病院血液・膠原病内科、秋元正樹先生の「全身性エリテマトーデスにおけるT2Tの現状と課題」についてのご講演が紹介されました。目標達成に向けた治療(treat-to-target; T2T)の概念は関節リウマチなどにも取り入れられて成功していますが、治療目標が単純でないSLE診療におけるT2Tの現状と問題点について考察されています。

「令和3年度鹿児島市産婦人科医会研修会」での鹿児島市立病院産婦人科、庄隆成先生の「経過中に心肺停止となった子宮型羊水塞栓症の1例」は、産科危機的出血の最多

死亡原因である子宮型羊水塞栓症による心肺停止に対して、ダメージコントロール手術(DCS)と経皮的心肺補助装置(PCPS)の導入により救命し得た症例です。また鹿児島市立病院産婦人科部長、上塘正人先生から「産科救急出血性疾患における対処法」として産科危機的出血に対する医療技術の進歩や管理法が紹介され、DCSとPCPSなど治療法の現況が報告されました。

「医師会病院だより」では中川広人先生から脳神経内科をご紹介いただきました。現在は6人体制で診療に当たり、令和2年度退院総数573例の中、6割以上は炎症性疾患でその内訳は神経疾患、呼吸器、感染症、血液・膠原病、腎・泌尿器、消化器、内分泌と多岐に渡っています。また発熱外来を開設して救急対応もされています。患者さんのご紹介をよろしくお願ひいたします。

「切手が語る医学」には古庄弘典先生から白衣、聴診器、薬のカプセル、温度計などをモチーフにしたスペインの科学切手と、ガンとの戦いを象徴する女神を描いたミクロネシアの乳がん研究切手をご紹介いただきました。毎号、世界の珍しい切手をご提供いただき古庄先生には感謝申し上げます。

今号の栗博志先生の連載は「フランス・リストと聖エリザベト - 第1部、フランス・リスト、その5-」です。

「鹿市医郷壇」には会員の皆様からユニークな作品を募集しております。奮ってご投句下さい。

今度は「ステルスオミクロン」なる、いかにも不気味な名称の変異株の出現でさらなる感染拡大が懸念されます。第6波はピークを越えたと言われるもの、まん延防止等重点措置は延長され、「爆発的感染拡大警報」は発令中です。医療提供体制が逼迫しないように、ひとりひとりがマスク着用などの基本的な感染対策と、3密を避けるなどの日々の行動を心がけましょう。

(編集委員 森岡 康祐)